様式第5-1号（第7条関係）

論 文 内 容 の 要 旨

氏　名	久保 慎一郎

Tracing all patients who received insured dialysis treatment in Japan and the present situation of their number of deaths

（ 和 訳 ）

日本における保険診療全透析患者追跡と死亡数の現状

論文内容の要旨

背景

日本の慢性透析患者の生存率は世界第1位を維持しており、高い治療水準を示している。日本における透析の実態を示すことは世界的にも意味がある。日本の保険診療データを集めた National Database (NDB)約1億人分を用いて、日本透析医学会の集計値と比較し補完が可能か検証した。

方法

NDB を用いて、2014 年から 2018 年の 5 年間に、日本の保険診療において透析加算を算定したすべての患者を対象に、年間有病者数や新規導入患者数、死亡者数を算出した。

結果

透析患者数は学会集計に比べ NDB が少なく(6-7%程度)、導入患者はほぼ同じ位の患者数であった。死亡者数は透析患者数と同様に NDB が少なった(6-10%程度)。血液透析では NDB の患者数が少なく、腹膜透析では NDB の患者数が多かった。

NDB 透析患者の累積生存率は透析開始時点で 6%程度低下しており、透析導入時に一定数の死亡が見られた。男性に比べ女性の生存率がやや高い結果となった。性年齢階級別にみても累積生存率は概ね一致した。死亡患者数も他の傾向と同様、学会集計に比べ 7%ほど少なかった。

考察

透析医学会の透析患者数に対して NDB 集計値が少ない理由として NDB は保険診療以外の医療を受けた患者数を把握できないことが挙げられる。しかし透析導入患者の集計においては、ほぼ一致していた。透析開始直後の死亡は、透析導入後すぐに死亡する患者数が一定数いることを示している。透析導入後は保険診療にて受療しその後一部対象外になると考えると概ね透析医学会の集計に近い。学会集計を NDB の集計に置き換えることにより、簡略化できるだけでなく、より迅速に集計が可能となる。

結論

NDB の利用により、透析患者の NDB 集計が可能となった。今後は薬剤の使用状況や他の疾患の併発等、手術や治療についてより詳細な分析が可能となる。本研究はその基礎研究であり、本研究の定義をもとに多くの研究に発展する可能性が高い。